京都大学学術情報リポジトリ
KURENAI 紅
Kyoto University Research Information Repository

京都大学
KYOTO UNIVERSITY

Title	現代支那名家著作目錄(五) 顧頡剛 顧頡剛氏の經歴と學術
Author(s)	小川, 茂樹
Citation	東洋史研究 (1937), 2(6): 580-597
Issue Date	1937-09-20
URL	https://doi.org/10.14989/138761
Right	
Type	Journal Article
Textversion	publisher

Kyoto University

現代支那名家著作目錄（五）

顧頡剛

古史研究法　古史辨題答李玄伯書　現代評論　十。（古史辨一所收）

中國上古史實習課旨趣書　中山大學語言歷史研究所週刊　五、五七·五八。

與錢玄同先生論古史書　讀書雜誌　九。（古史辨一所收）

答劉胡兩先生信　讀書雜誌　十一。史地學報　三、一·二。（古史辨一所收）

討論古史再答劉胡二先生　讀書雜誌十二—十六。（古史辨一所收）

答柳翼謀先生　北大國學週刊　十五·十六。（古史辨一所收）

五德終始說下的政治和歷史　清華學報　六、一。（古史辨五所收）

跋錢穆評「五德終始說下的政治和歷史」　大公報文學副刊百七十一。

戰國秦漢間人的造僞與辨僞　史學年報　二、二。

禪讓傳說起于墨家考　史學集刊　一。

王肅的五帝說及其對於鄭玄的感生說與六天說的掃除工作　史學論叢　二。

夏史三論　史學年報　二、三。

洪水之傳說及治水等之傳說　同　一、二。

紂惡七十事的發生次第　語絲　二。（古史辨二）

讀李崔二先生文書後　中山大學語言歷史研究所週刊　一、十二·十三。（古史辨二）

宋王偃的紹述先德　語絲　六。（古史辨二）

○

周易卦爻辭中的故事　燕京學報六。（古史辨三）

論易繫辭傳中觀象制器的故事　燕大月刊　六、三。（古史辨三）

堯典著作時代問題之討論　禹貢半月刊　二、九。

從地理上證今本堯典爲漢人作　同　二、五。

讀尚書禹貢篇之僞孔傳與孔氏正義　同　七、一·二·三合期

崔適之禹貢遺說　同　三、四。

盤庚上篇今譯　中山大學語言歷史研究所週刊　一、八·九。

盤庚中篇的今譯　平中半月刊一。（古史辨二）

金縢篇今譯　語絲　十一。（古史辨二）

論詩經所錄全爲樂歌　同　四十。（古史辨二）

北大國學週刊 十·十一·十二。（古史辨三）

詩經的厄運與幸運　古史辨題詩經在春秋戰國間的地位　小說月報 四、三—五。（古史辨三）

碩人是閔莊美而無子嗎　同　一四、四·二三。（古史辨三）

讀詩隨筆　同　一四、一—三。（古史辨三）

從詩經中整理出歌謠的意見　歌謠週刊 三十九。（古史辨三）

起興　同　九十四。（古史辨三）

毛詩序之背景與旨趣　中山大學語言歷史研究所週刊 十、百廿。（古史辨三）

邶風靜女篇的討論　語絲 七十四。

野有死麕的討論　語絲 三十一。歌謠週刊 九一、九四。（古史辨三）

褒裳　歌謠週刊 九一。（古史辨三）

瞎子斷扁的一例—靜女　現代評論六十三。（古史辨三）

關於瞎子斷扁答劉大白書　語絲 七十四。（古史辨三）

鄭樵詩辨妄輯本　北大國學週刊 五。

非詩辨妄跋　同　六。

重刻詩疑序　睿湖 二。（古史辨三）

讀周官職方篇　禹貢半月刊 七、六。

阮元明堂論　中山大學語言歷史研究所週刊 十二、百廿一。

中國古代戰車考略（揚向奎共著）　東方雜誌 三十四、一。

九族問題　清華週刊 三十七、九·十。（尚書研究講義三）

春秋研究課旨趣書　中山大學語言歷史研究所週刊 五、五十七·五十八。

讀爾雅釋地以下四篇　史學年報 二、一。

說丘　禹貢 一、四。

從呂氏春秋推測老子之成書年代　史學年報 一、四。

管子集註序　圖書館學季刊 五、三·四。

墨子姓氏辨　史學集刊 二。

○

古代地理研究課旨趣書　中山大學語言歷史研究所週刊 五·五十七、五十八。

五藏山經試探　史學論叢 一。孔德旬刊 三十四。

秦漢統一之由來和戰國人對於世界的想像

中山大學語言歷史研究所週刊一、一。（古史辨二）

漢代以前中國人的世界觀念與域外交通的故事　禹貢 五、三·四。

古史中地域的擴張　同　一、二。

州與嶽的演變　方志月刊 七、三。

寫在藪澤表的後面　禹貢 一、二。

戎禹與九州之戎　同　七、六。

有奶國考　同　五、十。

春秋時代的縣　同　七、六。

兩漢州制考　慶祝蔡元培先生六十五歲論文集 下。民釋雜誌 四、五。
論閩中文化(胡適之共著)　禹貢 五、五。
「十七世紀南洋群島航海記」序　東方雜誌 廿一、一。
明末清初之四川(黎光明共著)　同 二、十二。
王同春開發河套記　同 四、七。
介紹三篇關于王同春的文字　同 七、四。
回教的文化運動　大公報 廿六年三月七日
介紹「中華民國疆域沿革錄」　禹貢 三、六。

○

跋「河南葉縣之長沮桀溺古蹟辨」　禹貢 五、七。
關於葛洪古冢的通信　中山大學語言歷史研究所週刊 三、廿八。
楊惠之的塑像　小說月報 十五、一。
楊惠之塑像續記　現代評論 四、八十二。
四記楊惠之塑像　中山大學語言歷史研究所週刊 十、百七。
五記楊惠之塑像　同 十、百十八。
古物陳列所書畫憶錄　現代評論 廿—廿四。
西行日記序　晨報副刊十五年七月份

○

聖賢文化與民衆文化　民俗週刊 五。
天后　同 四十一·四十二。
泉州的土地神　同 二·三。
東莞城隍廟圖　同 四十一·四十二。
論中國的舊歷新年　民間月刊 二、三。
蘇州風俗序　民俗週刊廿一·廿二。
妙峰山瑣記序　同 六十六—七十。
傳說專號序　同 四十七。
孟姜女故事研究　北京大學研究所國學門週刊 一—四、七·八·十四。
孟姜女故事專號　歌謠週刊 八十三·八十六·九十·九十三·九十六。
孟姜女故事材料目錄　天津世報讀書週刊 八。
孟姜女故事研究集自序　民俗週刊 一。
關於孟姜女故事的通訊　歌謠週刊 七十九。
孟姜女故事的轉變　同 六十九。
華山幾與祝英台　民俗週刊 九十三—九十五。
關於祝英台故事的戲曲　同 九十三—九十五。
泉州民間傳說序　同 六十七。

○

歌謠討論(沈兼士等共著)　歌謠週刊 七、十一。
寫歌雜記　同 八十八—九十三。
天地間的正氣　孟姜女 一、五。
賣解的歌　歌謠週刊 二、三。
吳歌小史　歌謠 二、三十三。
吳歌丙集　民間文藝 十一、十二。
蘇州的歌謠　民俗週刊 十一、十二。
蘇州近代樂歌　歌謠 三、三。

湖南唱本提要序　民俗週刊　六十四。
序閩歌甲集　同　二十三、二十四。
福州歌謠甲集序　同　四十九、五十。
廣州兒歌甲集序　同　七、八。
台山歌謠集序　同　四十九、五十。
序「西藏戀歌集」　民間月刊　二、六。
關於謎史　民俗週刊　二十三、二十四。
戀愛戲　小說月報　十四、八。
九十年前北京戲劇　晨報副刊　十五·七·二十三。
欒州影戲　文學　二、六。
上海的小戲　晨報副刊　十五·二·二十四。

○

天問　中山大學歷史語言研究所週刊　十一、百廿三。
虞初小說回目考釋　語絲　廿一。
水滸後傳的著者陳忱　讀書雜誌　十七。
宋元南戲百一錄序　浙江省立圖書館館刊　四、三。
老殘游記之作者　小說月報　十五、三。
元曲選敘錄　學燈　十三年十月一日
明俗曲琵琶詞　文學　一。
火災序　學燈　十三年十月廿三日

○

中國學術年表及說明　民鐸雜誌　五、三。
晨報副刊　十三年十月。
東方雜誌　十一、十四。

孔子研究課旨趣書　中山大學語言歷史研究所週刊　五、五。
春秋與孔子　北大國學週刊　一。
春秋時的孔子和漢代的孔子　中山大學語言歷史研究所週刊　一、五。(古史辨一)
問孔子學何以適應於秦漢以來社會書　中山大學語言歷史研究所週刊　一、六。(古史辨一)
答郭氏論孔門學風書　民鐸雜誌　四、四。(古史辨一)
鄭樵傳　國學季刊　一、二。
鄭樵著述考　同　一、三、三。
明代文字獄禍考略　東方雜誌　廿三、十四。
清代著述攷(馬太玄共著)　中大圖書館週刊　一、一—六。二、一—六。三、三、五。四、三、三、四。
清代著述攷(陳槃共著)　同　五、一—五。
校點古今僞書攷序　史學年報　一、二。
崔東壁先生故里訪問記(洪煨蓮共著)燕京學報　九。
會稽章學誠的著述(陳槃共著)　中大圖書館報　七、三。
天算大家海寧李善蘭的著述(陳槃共著)　同　七、四。
瑞安孫詒讓著述考(陳槃共著)　同　七、五。
論康有爲辨僞的成績　中山大學語言歷史研究所週刊　十二、一—四。
咸陽劉光賁著述考(陳槃共著)　中大圖書館報　七、六。

閩侯林紓的著述（陳槃共著）　圖書館報（中山大學圖書館印）七、一。
中國史學界之將來　北平晨報學圃六、
文瀾閣目索引序　燕大月刊　六、三。
紀元通譜序　中山大學語言歷史研究所週刊　七、八十。
中國地方志綜錄序　大公報圖書副刊　八十。
九峰舊廬方志目錄序　燕京大學圖書館報　七十二。
拜魁紀公齋叢書序　浙江圖書館々刊　四、一。

顧頡剛編著單行本

漢代學術史略　民國二四、八。亞細亞書局　初版
古史辨　第一冊　十五、六。　樸社
第二冊　十九、九。　同
第三冊　廿、二。　同
第五冊　廿四、一。　同
三皇考（楊向奎合著）　廿五、一。　哈佛燕京學社（燕京學報專號之八）
尚書研究講義　第一、二、三、四、六冊　三三、一　景山書社
尚書通檢　廿五、二。　哈佛燕京社
孟姜女故事研究　第一、二、三冊　七、四—一六、一（民俗叢書）
蘇學的婚喪（劉萬章共著）　十七、四
妙峰山　十七、九
吳歌甲集　十五、七。　北京大學歌謠研究會
輯點本
明胡應麟著四部正譌　十八、九。　樸社
清姚際恒著古今僞書考　十八、一〇。　同
宋王柏著詩疑　十九、三。　同
清劉逢祿著左氏春秋考證　廿三、七。　同
書序辨　廿三、一〇。　同
宋鄭樵著詩辨妄　同
宋高似孫著子略　同
明宋濂著諸子辨　同
崔東壁遺書　廿五、六。　亞東圖書館
史記白文（徐文珊共點）　廿五、　北平研究院

顧頡剛氏の經歷と學術

顧頡剛氏の現代の支那古代史學、否一般に支那國學の有ゆる領域に亘つた絢爛たる業蹟を回顧することは一見極めて大膽、且つ困難な仕事である。茲に掲げた著作目錄の如き、脫漏のなきを保し難いのは勿論である。之に反して顧頡剛氏の學風の特質、顧頡剛氏の古史研究方法の發展を語る事は、或意味に於ては容易な事業である。氏には古史辨第一冊自序等の如き、自身の學術の經歷を自述せる長篇の文章がある。氏は不斷

に學問研究方法を自省し批判し、その次第に形成されて來た過程を見事な筆により客觀的に表現してゐる。顧頡剛氏が現代支那國學界に獨歩する所以は、實にその研究方法が獨異であると云ふよりは、誰よりも自らの研究方法を最も明瞭に意識してゐる點に存すると云つても過言でない。以下簡單に顧氏の傳記を叙し、その多面な學的活動を通じて、一貫する研究方法の進化の跡を辿つて見たい。

顧頡剛氏は江蘇吳縣の人、光緒十九年（一八九三）蘇州の有名な舊家に生れた。幼時家庭及私塾に於て古典の教養を受け、鄉里の小學中學に進み、次第に異常な好學多讀の性をなした。民國二年北京に遊學、北京大學豫科に入學した。入學當初暫く北京の戲劇の美妙に醉ひ戲迷時代を送つたが、その間、章太炎の國學講習會に參じ、次第に經學古今文學派の論爭に心を引かれ、民國四年休學して歸鄉病を養ふの間、淸代經學學派の對立の由來を極めんとして、淸代學術史を研究、「淸代著述考」を中心とする目錄學的著述の稿を爲した。民國六年病癒え就學、胡適の哲學史の講義を聽き頗る傾倒した。民國六年夫人の病に逢ひ、自身の病も再發、七年に至りまた休學歸鄉した。その間北京大學の歌謠採集事業起るに會し、蘇州の民謠を採集して、「吳歌甲集」の底稿を成し、更に胡適との書信往來、姚際恆の「古今僞書考」の標點を行つた。之より辨僞家の著述を集める辨僞叢刊の計劃は發端する。

北京大學卒業後、圖書館編目の職を奉じ、次で十年春北京大學研究所國學門助教となつたが、翌十一年祖母の病により三度歸鄉、商務印書館に中學本國史教科書編纂を囑せられ、その稿本は遂に未完成に終つたが詩書論語中の上古史傳說を整理せんとした試みから、圖らず堯舜禹が西周以後、次第に神より進化して實在の帝王となつた傳說の變轉に氣付いた。民國十二年「與錢玄洞論古史書」は此の趣旨を述べたが、劉掞藜・胡堇人の猛烈な辨難を受け、顧氏復相對峙して再三議論が上下された。此の論爭は氏を一擧にして學界の最前線に推し出し、之に關する論文は氏には無斷で曹聚仁なる人により古史計論集が編せられ、梁溪圖書館から出版された。之に慊らぬ氏は此の論爭以外にも主として、古典の本文批評を課題とする現代學者の著作を廣く彙集して古史辨第一冊を民國十五年出版した。

民國十五年秋、厦門大學國學院教授に任じた氏は、間も無く學校騷動に坐して逐はれ、廣州の中山大學文學院歷史系主任に轉じたが、之も永續せず、十八年遂に北上して燕京大學の教授となつた。此の間の氏の古代史研究の業は、重に民國十九年出版の古史辨第二冊に收められてゐるが、量は極めて少くて、僅に十五年

の作で後年の古史歴史地理研究の先驅をなす「秦漢統一的由來和戰國人對於世界的想像」と稍之に先ち、十三年頃の作で亡國の主たる殷王紂の事蹟が、周初以後が後代の文献に下る程多くの惡事を附加されて行く傳說の進化を取扱つた「紂惡七十事發生的次第」が注目されるのみである。

此時期に於ける氏の活動の主たる場面は、別の分野にあつた。當時廣東中山大學に起された民俗學會及び北京大學歌謠研究會兩方面の刺戟により、十五年、前述の「吳歌甲集」の稿を出版したを始めとして、一七年より十八年にかけては、詩經の鄭風「有女同車篇」に見える「孟姜」は其夫の尸に就いて城下に哭したと云ふ杞梁の妻と同じく、美女の通名であることに氣付き、廣く孟姜を主題とした故事傳說を採集して、孟姜女故事研究三冊、その他の民俗學的な著作を續出した。此等と相並行して民俗學的歌謠採集の體驗に出發して、近代歌謠と詩經の詩篇との形式の比較に立論し、胸臆を直抒し一定の形式を踏まぬ近代の歌謠徒歌に似ず、重奏復沓の多い詩經の篇は自然發生的な民謠自體に非ずして、職業的な樂工が樂に合はせるために調へた樂歌であると主張した「論詩經所錄全爲樂歌」がある。此の長篇を首とし、詩經を論じた短文は民國二十年出版の「古史辨」第三冊の後半に採錄せられる。

燕京大學教授に任じ、北京に定住した以後漸く精力を攷學に集中するの暇を得て、年來摸索し來つた古史研究の方法論を、實證に移さんとする氏の學的活動が爆發的に興つた。燕京學報・燕大月刊及び史學年報—民國十八年恐らく氏の主唱の下に、成立したらしい燕京歴史學會の機關誌—特に後者を通じて續々力作が發表された。十年の作「周易卦爻辭中的故事」は周易爻辭中に、殷代の古帝王王亥・高宗・帝乙及び周初の箕子・康侯の故事を發見し、之を西周の作品とし、之と比較して易傳に於ける堯舜禪讓・湯武革命・封禪・觀象制器の故事見えざることにより、易傳を秦漢の作と決定した。「論易繫辭傳中觀象制器的故事」と共に古史辨第三冊の前半の主要部を構成する。

先秦の經籍に現はれる古史觀念の發達を問題とした顧氏は、前記の論文發表の前後から、漸く秦代兩漢の學術思想史に興味を持ち、儒家經典に反映する秦漢思想の影響を重視し始めた。一九年の作「五德終始下的政治和歴史」は齊の騶衍より秦漢、王莽に至る五行思想の歴史、その道統論の演變を取扱つた。之を中心として漢の今古文學派問題に關する論文を輯めて、二十四年、古史辨第五冊が成つた。二十四年印行の「漢代學術史略」の單行本は古代思想史研究の出發點として

漢代思想の展開を究めんとしたのである。從來前漢末古文學派の興起を論ずる今文學者は、王莽時代劉歆を中心とする古文家說を攻擊、劉歆による古典の變改が稱へられたが、顧氏に於ては、王莽の簒奪を學的に反映する劉歆による經書改變より、更に一時代下り、後漢光武帝の中興が、古文家說に影響した點を明らかにせんとする點に於て、一歩を進めてゐる事注意せらる。顧氏の最近の著作「夏史三論」には書序及左傳に見える夏帝少康の夏室再興の傳說は、古文家により東漢初年に、光武帝再興の史實を潤色した故事であることを證明せんと試みたものである。

民國二十年以後に續出した氏の論文は多方面に亘つて居り、逐年的に之を紹介することは殆んど不可能である。我等はこゝに二三の主要な方向に就て語らう。

顧氏は早く廣州にあつた時代、漢代以前中國人的世界觀念を問題とし、後に禹傳說の批判に於て、禹貢九州よりして古代の歷史地理的知識の發展、その儒敎經典への反映を取上げた。氏の燕京大學に於ける「尙書研究講義」の印行された內に於て、堯典の堯の十二州を肇めたとの記事は、武帝の十二部刺史の典故として纂入せしめたのではないかと論じた。之は譚其驤氏その他の反對によつて問題となり、更に漢代に於ける州制の研究に導き、二十三年成つた「兩漢州制考」の雄篇を生んだ。經典の本文批評からして歷史地理・沿革地理への關心が昂つた。民國二十三年此の關心が主動機となつて、氏の提唱下に支那歷史沿革地理を研究せんとする學術團體禹貢學會が成立し、機關雜誌禹貢半月刊が創刊せられた。氏の熱烈な研究心は幾多の支那の多方面の古代史學者を此方向に動員し、着々成績を擧げつゝある。（禹貢に就ては本誌一卷二號森鹿三氏の「禹貢派の人々」及二卷五號日比野丈夫氏禹貢三周年記念號批評參照）

氏は一方に於て、民國二十四年七月から北平研究院に聘され歷史組の主任となり、茲からも考古組と協同して雜誌史學集刊が發行せられた。氏は今は燕京大學及び上記の二機關を通じて、氏の學術を慕ふ好學の青年學徒を麾下に網羅して、青年學徒との合作の下に大作を發表しつゝある。

儒家道統論、經典に現れる古史觀念、儒家の傳承する古史傳說を一の故事說話の演變の過程として、說明せんとする試みは楊向奎との共著「三皇考」にも現れる。前述の童書業との共著「夏史三論」も亦此の類に入る。

氏の多年の古典本文批評を中心とした、多方面に亘つた古史研究の結果を要約し、古史研究の將來の見透しを述べたものが、二十四年に出た「戰國秦漢人的造僞與辨僞」であつて、氏の學術の精華は此一篇に盡き

ると云つても過言でない。二十五年童書業との助力の下に成つた「禪讓傳說起于墨家考」は前著の一部分を附衍せるものであつて、經典に傳へる堯舜禪讓の傳說が、本來は戰國時代の墨家に行はれた故事を儒家が借用し來つたことを鮮かに論證してゐる。

顧頡剛氏の經歷、學的活動の跡は大體紹介し終へた。次に氏の學問上の立場、氏の古史研究方法に就て一言したい。氏の學問上の立場が前時代及同時代の一般の國學者と相異する點は、純粹に科學的—或は之を史學的と云つてもよい—な立場をとることにある。氏は第一に經學に非常に深い關心と造詣を有するに拘らず、學派的な偏見なく、今古文兩派の長所をよく綜合してゐる。學派的な經學を揚棄して科學的な史學の立場に立つ點に於て、淸末民國初の經學者と異る。

次に重要なることは、氏に於ては政治的な關心により學術が煩されない點である。民國初年の國學者、例へば氏の師であり、方法論に於ても非常に大なる影響を受けた胡適氏との相異點は茲にある。民國初の五四運動等の啓蒙主義學者は、從來古典學者の信古主義に反對して疑古主義を主張し、儒敎的偶像の破壞に全力を盡した。顧頡剛氏は此間にあつて、傅斯年氏の如き熱烈なる實行論者を友としながら、專ら學問に專心した。氏に於て偶像破壞は何等の政治的のものを含まず純粹に學問上の問題である。

氏は科學主義をとるが故に、政治的學派的偏見なく有ゆる學術の分科の專門學者の業蹟を尊重する。一般に今文學の影響を被つた疑古派と對立して、王國維氏を始めとし、現代の甲骨金文學の一派は釋古派と稱せられる。顧頡剛氏は此等の釋古派の仕事にも敬意を拂ひ、考古學上の結果と共に利用を忘らない。然し釋古派の古文獻の利用の仕方に、本文批判的な考慮のないことを非難してゐる。然し他の分科の尊重すると共に、自らの專門分科を古典本文批評を中心とする古史研究に嚴密に限定してゐる。多方面の問題を取扱ひつゝも、その研究方法の一貫せるは實に此の態度による結果である。

顧氏の本文批評の立場、古史研究方法の生成に關しては、氏の古史辨第一冊自序が詳細に述べる處であつて、今改めて縷述するを要せぬであらう。結局に於て氏の方法は胡適氏に負ふ所最も多いことは疑ふ餘地がない。胡適氏の注意により、淸代の辨僞家姚際恆及び崔述を知つたと云ふのみではない。顧氏の古史研究方法の最も特色たる、今迄不動の歷史事實であると信ぜられてゐた古經典史籍の記事を一つの故事傳說と考へ、その時代の政治社會思想の背景の影響による、潤色變化の過程を闡明せんとする一種の文化史的な考證

法は、實に氏の自白する所では胡氏の近代文學水滸傳或は紅樓夢の考證に暗示を受くるのである。北京遊學當初の戲迷時代の經驗が戲曲の構成法を知らしめ、又戲曲に現れる人物が、如何に多樣な潤色を被るかを敎へたことも此方法の成立に重要な契機をなす。更に一時民俗學的な運動に參加し民謠の採集を行ひ、或は實地に土俗を調査した體驗も、亦少からざる貢獻をしてゐる。

我等は最後に問題としたいのは、氏の學術と我が國の支那學との相互關係である。內藤湖南博士の「尙書篇次考」や「易疑」等の諸篇、津田左右吉氏の思想史的研究、或は家父の山海經・禹貢等の歷史地理的研究の諸著作が果して氏の眼に觸れ、氏に如何なる影響を與へてゐるかは、重大な問題である。此の點に關し氏は全く默してゐるが、恐らく多少の暗示は受けてゐるであらう。然し之等の暗示の有無その程度如何は問題として、豐富な文獻の驅使、徹底的な細部の辨證に於ては全く氏の獨特のものがあることは言を俟たぬ。

上に紹介した顧頡剛氏を主導とする、古史辨派の古史研究の方法論自體に關しては、今多く問題としない。古史史料の批判と整理は、現代に於ける支那古代史研究の最も重要な課題である。甲骨文金文の地下發現の新史料の研究も、之と結び付いてのみ價値を有すると云つてよい。顧氏の門下には陳夢家を始めとして此の意圖の下に甲骨文金文を研究しつゝある若き學徒があり、その將來の發展は刮目して待たれる。然し顧氏自身の論作の成果そのものに關しては、吾人には尙意に充たぬ點がある。顧頡剛氏の處女作とも云ふべき錢玄同・劉掞藜及胡堇人に與へて古史を論じた書中に提出された禹は動物であり、九鼎から出たと云ふ突飛な說は、多くの學者により反對を受け譏笑されてゐる。氏は後には全く一の假設として自ら放棄して仕舞つた。堯典の十二州は漢武帝の州刺史制の反映せる說話であるとの氏の論も、同樣にして多少修正の運命に沃した。最近の力作「夏史三論」に就ても、史記に於ける書序及左傳の簒入が、後漢時代に行はれたと云ふ假定は尙十分に論證されてゐない。もし之が誤であれば、恐らく全體の立論は根底より崩壞し去るであらう。氏の所說には多かれ少かれ、常に斯の如き弱點を伴つてゐる。然し一般に何等の作業用假設を持たぬ學術研究、特に古史の研究の如きは全然不可能である。顧氏にあつては極めて大膽に假設が立てられ、然もその假定が明瞭に意識して、適用せられてゐるのであつて、その假定は後の研究を呼起し漸次修正されて行きつゝある。その點も顧氏の欠陷と云ふよりは、寧ろ大なる長所と云ふべきであらう。

（小川　茂樹）